

19760105

文明（機械文明）の枠内に自己の宇宙を限定して、その内部で物欲なり権力欲なり何なりの増長を計ろうとする者は自己自身を、それらが象徴する物質なり、領域なり、或いは後継者なり等に投影することに依って、「死」の否定を証明しようとする。芸術にも又、これと同類の機能がある。つまり、ポードレールを待つまでもなく「美は永遠」だといふあてもない「根拠」に盲従することに依って、牢屋の中にはいくらかの真相が潜んでいるのかもしれない。キリストにせよ、仏陀にせよ、多分彼等は死を通過して来ることが可能だった人間達のように思われる。何か、多分は「偶然」に依って、死から蘇生したのではなからうか。そこから始まったいわゆる「宗教」自体（教会、寺院その他による機構化依然の）には何かの「真相」がある。

死を「環境」として捕ったところに在る「生」は、（私の現在の考えでは、）多分、心身双方の点で、究極的には一刻の安易さをも許容しないものではないか、と思う。人間の「生活」或いは「生」という事実の一面の中に、安楽の観念を持ち込んだ時点から、文明が開始されたのではなからうか。「安楽」そのものがこれほど人間の生活の中で重要なポジションを持つようになったのは文明開化以来のことではないだろうか。例えば、古代ギリシャに於いてでさえ、身体的安楽は、精神的苦悶に対する一種の便宜的手段だったと思われる。つまり文明は、人間精神の弛緩と相俟って、一方的な発展の仕方をした。それは死を隔離することに依って、地上に、一種の人間栽培用の温床を作り出す役割をしたわけだ。そしてその温床

19760106

一九七六年十一月 月曜

カータとフォード。米国大統領選挙の投票が明日行われることになっている。ヴァーディング・デイ(VOTING DAY)ではなくてポーリング・デイ(POLLING DAY)、とのこと。つまり、直接投票に依るものではないというわけ。トム・シュナイダー司令のトゥデー・ショウというのに、約二十分間程、死に入っていたという人物が現れる。最近見聞したものの中で最も胸底に迫る。このような人物の話であるならば、一日中聞き入っていてもよい。

繻物をしながら、死に就いて考える。もともと、私の念頭この死に就いての観念がこびりついてしまったことの由来は、日本語の「死」という文字。或いは言葉（特に文字）に対するやや病的な嫌悪感—一度ヴィクトリア的に取り憑かれた人間が性に対して示すかもしれないような一種の猥せつ物に対するあの奇妙な動揺—を自分自身の中で発見したことから発する。「死」と敢えて書きつけることに依って、その克服を計ろうとした辺りは、ローレンスはおろかフィリップあたりの企てに似ているのかもしれない。

煎じつめれば、芸術を含めて、その人間的行為が示すものは、この「死」という一点にある。（ところで、性を「生」と発音する日本語は真を突いている。）いわゆる冷血無常な科学への傾倒は、元々は巨大宇宙に介在する星屑から発生した教法的法則に依拠することに依って「永遠」という理念に向かって走ることか。その中に一時的な陶醉が在りて自己を紛らわせようとする試みであり、又、所詮

19760107

などが問題にされた場合、特に我慢できなくなってくる。即ち、フランクが属する型に対しては、私は終始一貫して、一面性を保つことを強られる。それが、善であり、悪であり、凡であり非凡でありその内容のほどは一向に構わない。彼らの持つ「脆さ」は、この一面的にしか他と関わっていけないという点にある。仮りにそれに関わって行くと、相手側に依って全面的に破壊される場合が多い。その点で、彼らは独善的で、保守的だ。こういう種の人間には又、善人も多い。善人以外にはなれないのかもしれない。天使の退屈さ加減も又、ここにあるのかもしれない。天使が馬鹿にされるわけもここにある。それに比べると、ハミッド達には、善の灯りに細々と映し出されている一枚の紙以外の構造がでんと構えている。それは、複雑怪奇で、然も大変な悪臭に満ちたものでもある。彼らには善というものを自分自身の意思で自由に決めることができる。全面的に破壊されるという羽目には陥らない。善が打ち砕かれれば、悪が出て来る場合もある。善も悪も彼等の中では一体なのだ。運ちゃんは私のチップを多分、善とも思わず今頃は多分忘れてしまっているだろう。ところが、若しも同等の好意を私がフランクに対して振舞ったとしたら、彼は一生そのことに就いて気をまわしていることだろう。仮りに、私がハミッドをすっ飛ばしたとしたら、（事実、何度もやったことだが—）平気な顔をして、すぐ様電話をかけてきて、もうその時点で次回のことしか考えては居ないだろう。多分、フランクは今頃人生問題に関わる大事でもあるかの如くに、くよくよしているに相違ない。

19760108

こういう人物に対しては、私自身文句のつけようがなく、然も終始、妙な焦燥感につき纏われる。何とはなく、「相手を傷つた」という漠然とした

感情が、別段、私自身が何も彼等に対して悪行を働いたわけでもない場合にすら、つきまとう。だからと言って、こちらから積極的に彼らの幸福感を助長するための何事かをしようという気持はさらさら起らない。彼らには崩れ易い脆い甘いウーキーのような感触がある。私が触るとすぐにぼろぼろと崩れる。救い難い気持ちになり、いっそのこと叩きつぶしてしまうか。そこにあっても気が付かぬふりをするかのどちらかだ。罪悪感ばかりが膨張する。それに比べるとあのこすい運ちゃんが所属する人間達は丁度餅かアメ菓子の様なものだ。下手に触ったり喰いついたりすると、相手の根強さにこちらの方がへこたれる。どうつねても叩いてもしぶとく立ち向ってくる。そのうちこちらの方が呑み込まれてしまいそんな錯覚にも捕われる。そのほうが私にとってはよいのだ。例えば、私の感じでは、どうも妹はフランクとハミッドとを同一視している傾向があるように思われる。妹にとっては両者が良く似た者同士に思われても仕方がない。二人とも男前は余りよくない。教養はかなりあると思われる。新進思想の持主でしかも純粋な信奉者でもある。然し、私から見ればこの二人の間には全く巨大な隔りがあるのだ。一方はその善良さに依って自分を支えて居り、他方は善良さを自分でしぶとく支えている。フランクの善には気脆があり、ハミッドの善には、その反対或いはその何物をも附着させて泰然として居れる粘着性がある。私は善・悪にはさして関心を払わない。然し、この気脆と粘着性には大変な開きをつけているわけだ。これは、こちら側の意向、傾向

19760109

ともかく、私は、自分がそれほどの悪い奴ではない、ということ、そこであの見知らぬ運ちゃんに対して証明し得たわけだった。冷酷な人間でもない。或いはフランクは十時十分すぎにやって来て人跡のない、カランとしたボックス・オフィスの前で呆然となったのかも知れない。無理をしても十五分まで待って居れば良かったのだ。大した無理でもない。若し、これが私の男だったなら、芝居を無視してでも待っていたら相違ない。ところが、男としては無論のこと、人間としても余り私にとっては魅力のないフランクからは、どうみても、そうするのに必要なエネルギーを汲みとることができなかった。彼は、私が大体きまって、「やっつけてやりたい」と考えずには居られないタイプに属している。つまり、どこかに「可哀そうな」「善人めいた」ものがある人間なのだ。この種の人間の延長戦の終局には、何となく神楽に似たお定まりの善良さがある。「やっつけてしまった」あとでしか、私には彼等に対するどんな種類の感情も湧いては来ない。その感情も殆んどはれんびんの情か、或いは自分に対する罪悪感に類するものだ。そして、この罪悪感の解消を計るために、私は、あの運ちゃんのような人間に対して、必要もないのに優しく振舞うのだ。こんなことを繰り返していたら自分の損になるばかりだ。結局のところは、フランクとはつき合わないほうが良い。こんな時に、私と妹との相違がかなり明瞭に出てくる。彼女の好む男には大体、フランク通ずるものがある。つまり、私達の父親と同類のものである。良く言えば、私心のあまりない正直な善良さの印である。

19760110

この男は知らなかったかもしれない。黒人はその綴り方を私に訊ねた。私も曖昧だった。すると、今度は、中年の肥えた白人男が入って来て、ダリア・アヴェニューは良く知っている、ガリリンを運んで歩いているときにこの近くでよく見た標識だ、という。ところが、いざとなつて、それがどこに在ったかというように思い出せない。地図の上を太い指で辿りながら、用事のない時にはすぐに見つかるのだが、さて、と持ち出すとなかなか目につかないと云う。それでも、やつのことで、マジック・マーカで印された黒い輪に半分隠されて、ALIA というのが見えた。これだ、というわけで、又車に乗る。一分も走らぬうちにダリアに着いた。六十五セントくらいのところを一ドルふん発したために運ちゃんは機嫌が良い。誰を訪ねるのだと云うので、「自分の所だ」と云うと「自分の居場所を知らないとは・・・」と云って呆れたような顔をして笑った。「今度は地図を持って車に来るんだね」「どうもそうしなくちゃならないね。」気前の良いチップの上に、私が別段文句もつかなかったので、気を良くした運ちゃんは私が中へ入って、階段を登りかけてもまだ表で待っていた。手を握って、大丈夫だという合図を送ると、それでもしばらく止まっていたが、階段の途中の踊り場の窓から見ると、カーブを切つて戻って行くタクシーの後燈がみえた。あのこすい運ちゃんのやることを最初から見透かしながら、こっちの方から善意的に彼にもうけさせてやったことで、気分が大層良かった。私のことを「人の奴れもいるものだ・・・」と彼が考えたであろう、と思って楽しかったわけだ。自虐の傾向の現われだろう。それとも一種の罪悪感から起った感情なのかもしれない。

19760111

に詳しくないことを直に見透かされ、妙な手回しをしたあと、ガス・ステーションの前で止めて貰う。何処に居るのやら見当がつかない。運転手にもかく、一ドル八十五セントの上に五十セントのチップをつけてやって出る。何を思ったのか、私が一寸歩いて行ってふり返ってみても、そのタクシーはまだそこから動かない。どう考えても見馴れぬ光景だったために、又タクシーに引き返した。すると、運ちゃんは、私を中で待たせて、ガリリン・スタンド

のオフィスの中へ歩いて行った。小柄な男で、ピンク色のシャツを着ていた。運転席と客席を区切っている防弾硝子のせいで、顔が平坦に見えて、東洋人かと思っていたが、そうではなさそうだった。私も表へ出てぶらぶらと歩きまわったが、「そこ」という植物園にすら全く見覚えがない。それほど走ったわけでもなかったから、フラッシング外へ出てしまったわけでもあるまい、と思っていると、スタンドの中から、背の高い黒人が何か云って、私に向ってそちらへ来るようにと合図をしている。明るい照明のある中へ入ってみると、その黒人と運ちゃんが、一生懸命に壁に貼ってある汚れた地図を眺めまわしていた。ダリア・アヴェニューだといくら私が云ってもわからないような顔をしている。「花の名前のようなものだろう？」と、さき車の中で云った私の言葉を繰り返しながら運ちゃんが念を押す。道から外れたとき、私がそれを云うと、彼は「G」で始まる名前だと思ったんだ、なんと勝手にゴマ化していた。ガリアではシーガーの戦艦型物にはなつたとしても花の名前にはなるまい、それともダリアが花の名前だとは

19760112

詩的或いは暫的対象としての興味の種にはなつたとしても、真実、余り意味のあることではなかつた。英語で話すときには、如何にも軽々しく、この言葉が出て来たが、日本語でそれを口にするには周到に踏んでいたし、耳にしても余り心良くはなかつた。「死」が私の心中で、これまでで、頑固なタブーとなつて来たことに気付いたのは、全く心外だった。deathの巧妙な魔術に引っかかってしまったのだ。同様な現象が、他の様々な点に就いても云えるのだろう。

劇場を出たのは十一時近かった。ナイン・アヴェニューだということを忘れてしまい、人通りの無いその道を五十八通りまで行ってしまった。そこから、見覚えのあるカルチュラル・センターの建物が夜景の中で珊瑚礁が何かのように映つたので、そっちの方へ曲り、地下鉄の中へ入る。今度はエスカレーターがついていた。下って行くときには、何ら変わった感じにはならない。然し、地下から地上に登って来るときには、特に周囲に人間が居なかつたりすると、自分が丁度墓場から出て来ようとするヴァンパイアでもあるかのような気分には捕われる。入るということは出るという状態よりは意識的な操作を要しない。長い地下鉄の後で十二時かきりに七番線終着駅、メイン・ストリートに着く。電話ボックスが両側に一ヶづつついていてと妹に教わった出口を出ると、駅前にタクシーが並んでいた。屋根の上に大きな霧籠のような明りのつく三角形の箱がついている。この辺りの地図

19760113

台につ立っているだけだった。二度目に与えられた「生」とはさぞかし密度の濃いものなのだろう。一度目は余りの偶然性と知覚の未発達ゆゑにまどわされて気が付いた時には「与えられた」という意識は、既に他者の把握に依る人工物と成り果てている。そこから新たななにかを受けようとするのは困難なことだ。「生」は、どことなく、自分のものでありそうな、又、無さそうな漠然とした存在感の中でとりとめもなく続行する。然し、二度目に当人の意識の明確さの中で、様々のそれまでに付着していた「生」そのものの意味と実感の、それが一段と鮮明になった瞬間（例えば、死を眼前にしたために）に、「与えられ」た場合、その生命はさぞかしずしりと重く、明瞭な形体を持っていることだろう。死が生との関連の中で捕えられているように、生そのものの把握に何らかの必要から迫られた者にとっては、それを死との対照関係の中で捕えるのが最も要領のよい方法なのかもしれない。私はdeathという言葉に、これまで長年（十五年間！）惑わされていたために、「死」を何処か心中の所に隠し続けていたような気がする。否定せざるを得ないもの、隠す必要のあつたものは、タブーとなり、タブーは畏れつ感を伴って意識される。「死」という文字、或いは音に私はこのわいせつなものを強く感ずる。deathにはそれがない。と同時にdeathは、あくまで、私にとっては異郷で行われるものの抽象体でしかないわけだ。それは異国人のもとにふりかかる厄介事の一種で、私には

19760114

みだりに切り刻んで、タトゥー・ステイクにしてしまうという歌詞から来ている）という音声だけが聞き取れた。一般に云って強盗成金のマックの威勢振りを描いたものらしい。第二場はマックが緑色のピカピカ光る上着を着て、バットに腰を下ろしているところから始まった。そこへパーリーがマックの罪状を書いた長い紙片を持って現われ、そこから彼の逃走話が始まる。十時かきりに又休憩になった。今度は私はロビーへ出て一服した。十時から十時十五分かけてフランス・サッカーがボックス・オフィスで待っているとのことなので、内で座っているバカも行かなかった。濃紅のロープで繋がれた鉄棒が柵の繋ぎ目を隠しているその側に、ガラス製の角テーブルがあり、その横に、大きな灰皿用の筒形のものも置いてある。私はそこで、ぶらぶらしながら十分ほど待っていたが、彼は現れて来なかった。十分経過するとベルが鳴り、監視人らしく制服を着た小柄の黒人が深紅色のロープ

を鉄の棒に張って行くのが見えた。仕方がないので「柵」の内部に入り、あとの五分はどうしようか、と考えたが、これまでに顔を出さないのなら、多分、もうやっては来ないだろうということにして、中へ入った。

第三場では、マックがともかく、たい捕されて、絞首台に登る。本来ならば、そこで死体と化すわけだったが、今のものは客の気に入るような「セチメソナル」な解釈をして、土壇場寸前で女王からの特赦が下りることとなった、ということだった。マックが果して、そこでドストエフスキー的観照を行ったかどうかは知らないが、あとは只呆然として木像のように舞

19760115

出て来た。顔面を真白く塗った肥えた男が見えた。気が付くと、舞台の右にある穴の近くに茶褐色の木製の箱が長い脚に支えられて置かれ、それを、これも大柄の男が手まわしの芸らしく、まわしながら、唄をうたい始めた。いつの間にか、大勢の前方後方に分散し、開いた舞台の上で手脚が妙に長く硬直した男が現われ、操り人形のような舞踏を始めていた。それからか、その以前にか、はっきり記憶にはないが、まるまるとよく肥えた白髪の小男が黒いチョッキ付き背広姿で現われ、何かわけの解らぬことを大声で解説する。そのうちに何とかという詩人まがいのものが登場して、食業入門をする。・・・という具合に演劇が展開し始めた。一時間後に休憩があり、その間、私は、土居健郎の漱石に関する「甘えの研究」という日本語の文庫本を読んでいた。十分後に第二場が始まった。プレイト原作なのだそうで、第一場では、マック・ザ・ナイフがポーリーというソホーの花を見合で締結する場面が主題になっているようだった。舞台の話をし、言葉に馴れるまでに時間がかかったので、余り中身は覚えてはいないが、スコット・ランド・ヤードと、マックとがやる歌と踊りが一寸滑稽で、ぎこちなく思われた。パンフレットに依ると、人種的偏見(西欧娯楽的)が現われているそうだったが、私には最後のくだりの「ター・ター・」(ター・ター・ステーキを指すター・ター・。つまり、自分以外の唄に属するものは、木片

19760116

白紙を取り出し、何かの数字をそこに大きな文字で書き、それから、私の名前を訊く。フフ、と云い始めると、「まあ、いいや。書いても書かなくても同じことだからさ。」と云って笑いながら、白い切符をくれた。それを持って行くと、今度は(無事に通過できた)座席についたが、八時に開始される筈の舞台には人影先物景先無かった。濃灰色の硬そうに光っている舞台の床の前方には、3ヶばかり穴が開いており、その中には照明に当てられて、ポロリと落ちているバットのようものが穴を上から区切っている仕切り板の下に見えた。オーケストラは、通常のように、その穴らしいものの中には無くて、舞台の右側の一角にあるのが見える。緑色が強い照明の中に、真黒な人影が並び、ざわざと楽器の音を立てていた。左側横手の下方の観客席のほうで、しきりと私の座っている方角を振り返っては見ている中年くらいの男が居た。黄色の濃い茶色の服を着て、つるつるとよく光沢のある赤ら顔をしていて、まるで見覚えのない顔である。私の隣には、青いビツ・スーツを着て白髪を綺麗にセットした肥えた初老の婦人が居り、反対側の隣には、黒い長い髪をして、ユダヤ系の顔立の若い娘が赤いセーターを着ていた。二人とも男の連れが居た。黒い夜会服のようなものを着て、両肩を露出した若い女が遠くの席へと入って来るのが見えた。暫くすると、オーケストラが音楽を奏で始め、暗い背景の中から、乞食のような格好をした大勢が歩み

19760117

一九七六年十月十三日

昨夜、ヴィヴィアン・バウモント劇場・ブロードウェイ六十四丁目へ単身「三文オペラ」を見物に出かける。六時半にここを出て、地下鉄七番電車でタイムズ・スクエアまで行き、そこから、アップ・タウン・ローカル一番で五十九丁目、コロムビア・サークルのど真中に出る。そこから、徒歩で約五ブロック歩くとナインス(九)アヴェニューの進行方面左側に出て、噴水のある小広場を越えてメトロポリタン・オペラ・ハウスが見える。そこに入り、オペラハウスの右側にある茂み人工地などある小庭があり、その向う側、オペラハウス横を多少入ったところに、そのヴィヴィアン・バウモント劇場があった。劇場自体は、余り目立たない単調な感じのする建物で、内部は、気の利いたオフィスか、旅行会社のロビーのような感じだった。指定された座席は、オーケストラ席の最上段、舞台から真正面のところに位置していた。大体八時きっかり(とはいえ、劇場へ入ってから、切符これは妹・史が何かの劇場サークルから入手したもので、オフィスボックスで、規定のものと交換する仕様になっていた)のやりとりで手間取ったということもあるが、階下へ行けというので、真下まで行くと、そこは又、上とは異なった劇場に属するものらしく、「三文オペラ」なら階上だという。丁度その中間に、古臭い銀行の窓口のようなボックス・オフィスがあった。私の手渡した緑色の切符を受け取った若い男は、タイプ用紙くらいの大きさの

19760118

振りを聞いているようなものだった。何処かで何かは起きているには相違なかったが、それらの知識が、本質的なものにはなかなか関連して行かない。日常会話の話題程度の用は足したとしても、私自身が痛感していた質問への解答にはなり切れなかった。そうしたことを数年続けているうちに知らず知らずのうちに私のフラストレーションは解消したが、同時に、その間に日常化されてしまったニュースあたりが、私の生活自体かなりの比重をかけて定着していった。一端不安感が解消され、そこから新しく出て来た傾向が定着してくると余地の局面は、表面的な解決策を適用するだけでも、結構、おびやかされることなく、生活して行けた。そういう七年間が、良人のところから飛び出すまで、続いていたわけだ。十四年間中の後半期に当たる後の七年間は、そういう点では、謂わば、新たに出現した状況に対する適応のやり直しから発足していた。とは云え、私が、真実、アメリカの社会で「独立」していたわけではない。「良人」という明瞭な「庇護」が無いのだから、あるよりは「独立」の方角に傾いていたのかもしれないが。

19760119

と、当時の私の内外の事情をいくらか通じていた友人は云った。「2年くらい経って元に戻ったら離婚して帰ってくるよ。」とも彼女は云ったものだ。それから、七年経過するまではどうとう離婚もなかったし、十年経ってから初めて帰郷ということをした。然も、元へはまだ戻ってはいないのではないかと考えられる。その「元」が何処であり、何であるかさえかなりうたがわしい。だからこそ、ここに座って、四十歳を迎えつつ、生き悩んでいるのかもしれない。) )

そのような具合であったから、私が頼りに出来たものは先ずこちらの新聞があるだけだった。いざ、そうなると、今度は英語で悩まされた。朝食は、ランチ・アワーに良人が帰宅するまで、テーブルを前にして座ったまま、新聞だけを読んでた。それでも、一面の十分の一も読み通せない。午後からも続けて、一日中、新聞読みだけをしてたことも数度、或いは数限りなくある。そのうちに、読み終えていない新聞ばかりが山積し始めた。仕方がないので、関係のありそうな見出しのついているヶ所だけ切り抜いて、後で英語にもっと慣れてから読むことにした。その切り抜きがまた山積した。運良く、ニュース・ウィークという週刊誌を見つけたので、次には、一週間かかって、それを読むことにした。遺憾ながら、それすらテレビ台の下で山となって行く状態だった。テレビには簡単なニュースが放送されていたが、アナウンサーの早口には当初は、殆んどついて行けなかった。そのうちに、いくらか解るようにはなっても、事件の実況報告をそそくさとするだけの話はこちらにその背景が出来ていなかったせいで、丁度トンチ教室中の豆知識の披露

19760120

そんな点でも、私には「日本人」の国際的ありかを一応は確かめて置く必要があった。然し、そうってから、私がいささかうたえ気味に発見したことは、その必要を満たすための資料が殆んど私の手許には無かった、ということである。本は数冊というよりは、数十冊持って来た。事実、良人に文句をつけられた程だった。然し、日本を出発する際に、「アメリカのことを学ぼう」と言う私の気持ちから選んで来たものと云えば、こちらの歴史の本から始まって、アメリカ料理法に終始する程度のものか。学生時代から、その時点まで当時流行中の実存主義に関係したものがかりという有様で何の役に立たなかった。というわけか、日本造庭法に関するものと、私の父親が大事にしていた九鬼周造の「いきの構造」の初版が金原省吾著の美学に関する古書などと共に、数少ない日本に関する本の中に混んでいた。今から考えると、来米をひかえているというので余程頭が混動していたのだとしか思われない。(告白すると「渡来」という事態自体が私の生活線上では、当時、一種の「脱走」を意味していた。おそらく、それがアメリカでもフランスでも、そこまで羽を広げなくても、或いは四国や九州でも良かったのかもしれない。ともかく、東京から脱出したかったわけだった。

「まるで自殺行為のようなものだ。」

19760121

の場合私のこれまででは大体皆無に近かった。米国での生活に於いて、表面以上に関わって行く必要のあった場合は、そうした近卫的対人関係の中にはなくて、非対人的な状況の中で最も身に迫って出現した。例えば、国際、国内政治問題状況などがそれである。当初、私の関心を

最もよく惹きつけたものは、この国際間の政治と、「日本人」としての私自身が、そのどら辺りにひかかるか、ということだった。これは、それ以前から私自身の中に政治意識が強かったというのでは決していない。むしろ、そういうものが苦手だったせいで生じた一種の不安感に根ざしていたのだと、いったほうが正確だろう。つまり、私はアメリカで、生まれて初めて「日本人」であるという事実を意識したわけだ。そうしてみると、この生まれの「日本人」は、自分の所属する家が、隣近所の間で占めている「位置」をどうしても(仮りに独断的ではあっても)明瞭にさせる必要に迫られる。そこから始まって、世間全体の地図もある程度混迷状態から放出してくれる程度には、頭に入れて置きたくなる。その上、私の出国当時の日本での一般風潮には、スペリオリティ・コンプレックスに由来する白人社会の他人種に対する冷酷性がしきりと尊にのぼっていた頃だった。私の父母が、一番心配していたのもこの点だった。事実、うっかりと「南部」などへも行った頃は、リンチでもされて大変なことになるかもしれない、とすら口には出来なくても、漠然と念頭にはあったようだ。

19760122

と、こちら側との間に一定の境界線を設けて、それを乗り越えない、ということである。その一例には「日本人だから」。

私は実際に言葉通りに云って、何度も窮地から脱した覚えがある。

「日本人だから意見を異にする」とか、「…だから違った行動をとる」とか「…だからお互いに理解出来ないのでしょう」とかと適当に誤魔化したものだった。相手側に与えるこの「日本人」という映像効果は率直に云って、どうでもよかった。私自身が社会的には繊細な立場にあったために、その周囲を取りまく人間達が、私の発言を国際問題にまで発展させるという危惧がまるで皆無だったからだ。旅の恥は書き捨て式である。然し、そのお陰で、私は大体何処に居ても第三者的自由を享受することができた。つまり、彼等と一緒に楽しむことは楽しんで、一たん事厄介となるとそこから奔走することが出来たのである。怒ったり、或いは軽蔑したりした人間も多分はいたのかもしれないが、実際には、誰も、この神秘的国境を超えて、私の人間性の内部に入りこんでは来なかった。彼等にそうさせざるを得ないような個人的な魅力が私にはなかったからである。同時に私のほうからも、彼等の生活感情の中に入って行きたくなるような、或いは入らざるを得ぬような状況設定